

## < 編集後記 >

本号は今年はじめてお届けするセンターニュースです。今年も情報連携基盤センターのサービスや、関連するキャンパス内外の話題について、読み応えあるセンターニュースを編集して行きたいと思います。どうかよろしく願いいたします。

最近になって、本号の河口先生の記事に紹介されているキャンパス無線LAN実証実験のnuwnetを使い始めました。私は経済学部にはいますが、経済学部の建物ではほとんどどこでも接続可能です。タブレットPCを持ち歩いて使っていますが、ユビキタスを実感できます。ただ、生来の怠け者なのである私のような人間にとって、ネットを「湯水のごとく」使えるという感覚は果たして手放しで喜んでいいことかどうか。そもそも湯水だって誰かがコストを負担しているから供給されるわけです。加えてネットの場合は、得られるサービスが自明でないというのか価値創造的な側面があるため、中央集権的な管理下でユーザ側が完全に受身になってしまうことは良くないかもしれません。

巻頭言で阪大センター長の下條先生も言及されている、MITスローンスクールのBrynjolfsson教授のアメリカ企業に関する研究では、IT投資が企業価値の増大に結びつくのはIT投資と共に組織の分権化が進められた場合に限る、ということがほぼあきらかになっています。日本企業についても類似の研究結果が報告（元橋一之『ITイノベーションの実証分析－日本経済のパフォーマンスはどう変化したか』、東洋経済新報社、2005）されていますが、国立大学法人のような非営利組織ではどうなのでしょう。

情報基盤のありかたとして、中央集権的あるいは一元的な管理は不可欠と思われる。本号の田島さんの全学ID運用に関する記事を読めば、その必要性が良くわかります。一方で、大きな組織の分権化を可能にし、それによって組織全体の効率化をもたらすのもIT化による情報インフラです。法人化とも相まって、大学の組織も大きく変わっていくのでしょう。どうころんでも、私のごとき怠け者が住みやすい世界となることはないのでしょうか…

(J.N.)